

イ 二条城

(7) 二条城の今と昔

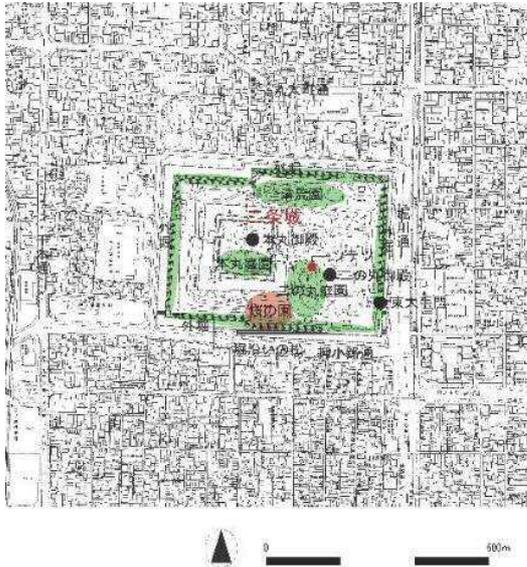


図2-34 二条城

徳川家康が諸大名に造営を命じ、将軍上洛時の京都宿所として建設した。第3代将軍家光が伏見城の遺構を移すなどして増築を行い、寛永3年（1626）に現在の規模になり、後水尾天皇の行幸を得た。その後、30万人の大軍を率いて上洛した家光を最後に、幕末までは政治の表舞台に登場することはなかった。幕末、第14代将軍家茂が家光以来、230年ぶりに上洛して、再び政治の表舞台となり、第15代将軍慶喜の時に二之丸御殿の大広間において大政奉還が宣告された。

明治初期には京都府庁として利用され、その後、宮内省の管理となり、大正天皇御大典の儀式などに利用された。昭和14年（1939）に京都市に下賜され、市民に公開されるようになった。

二条城は、城全体が国の史跡に指定されている他、二之丸御殿が国宝に、22棟の建造物と二之丸御殿にある計954点の障壁画が重要文化財に、小堀遠州の作と伝わる二之丸庭園が特別名勝に指定されている。さらに平成6年（1994）には「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界文化遺産に登録された。

二条城の魅力は、二之丸御殿の建築様式、二之丸・本丸・清流園の各庭園、あるいは狩野派による障壁画等様々あるが、外から望むと、漆喰壁の門や櫓、石垣、それを取り囲む水堀と堀沿いの松

の植栽と、堀沿いのピラカンサの緑が昼間の日の光に映える姿が魅力的である。また、夜には東大手門がライトアップされ、夜の京都の町のアクセントとなっている。



写真2-56 二条城 提供 元離宮二条城事務所

(イ) 二条城に見る歴史的風致

日常的には市民の散歩の場であり観光地である二条城だが、ハレの催しが定期的に行われる場でもある。その一つが清流園を会場に開催される茶会である。春は市民煎茶の会、秋には市民大茶会が、それぞれ3日間開催される。どちらも平成21年で55回を迎え、半世紀以上も続く二条城の恒例行事として定着している。

また、サクラの名所としても有名であり、サクラの美しい時期に合わせて、城内のライトアップが行われる。秋には二条城の魅力アピールするため、二条城の建物や庭園を巡るなどの他、様々な催しを行う「お城まつり」が開催されている。

そして、二条城も京都御苑と同様、伝統の技を受け継ぐ人々が活躍している。

二条城では、昭和14年（1939）、京都市に下賜されて以降、二之丸庭園・本丸庭園・清流園は市の職員が中心となって維持管理を行っている。

二条城の樹木のほとんどは江戸時代後期以降に建物が取り除かれた跡地や周囲の土手に植栽されたものと推定され、樹齢150年以上経過したものもある。

クロマツ、アカマツは樹木総数の約1割を占め、二条城の庭園木の主たるものといえる。マツは二之丸御殿本丸御殿の書院造りの建物や、その他城郭建造物の景観に欠かせない存在であり、堀端のものは、城の風情を醸し出す道具立てとなってい